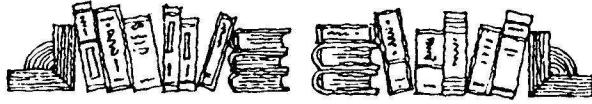


国語国文学会だより



No. 48

2013. 5

日本文学科卒業生の会

国語国文学会

平成二十四年度秋季大会報告

平成二十四年度秋季大会を十二月一日(土)、百年館に低層棟二〇六教室にて開催しました。

◆午前の部(研究発表)

・『落窪物語』論——少将道頼の人物造型を通して——

本学博士課程前期一年 大原智美氏

・『今とりかへばや』宰相中將の嘆き

——女君と宇治の若君の母子関係を視座として——

本学博士課程後期一年 伊達 舞氏

・六代説話重衡譚

本学博士課程前期一年 石澤侑子氏

・風流アイ(鉢叩)試論

本学博士課程前期一年 三浦 玲氏

・時令の衰退について

本学博士課程前期一年 遠藤聡美氏

・興隆期の京劇——芸術としての進化——

本学博士課程前期一年 上田七海氏

・夢野久作『鉄槌』論——「悪魔」思想の在処——

本学博士課程前期一年 大西清香氏

・村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』——世界の逆転——

本学博士課程前期二年 上田早弥子氏

◆午後の部(公開講演会)

・加速する情報資源と図書館

本学准教授 大谷康晴氏

・源氏物語の時間

青山学院大学教授 高田祐彦氏

◆懇親会 於 七十年館一階サロン

講演要旨

源氏物語の時間

高田祐彦

時間は必ず先に向かって進んでいるが、私たちはその中をいつもまっすぐ進んでいるわけではない。一度過去に戻って考え直し、常に繰り返し戻りながら進んでいく。『源氏物語』においても、様々な人間が自分の暮らしている境遇・世界に対して前に向きつつ、後ろも振り返る。そのように、前に向く力と後に向く力と両方働きのながら物語が進んでいる。『源氏物語』という長編物語の中で、どのように物語の時間が進むのか。作中人物に即して様々な多面的な時間があり、そのような時間を物語の世界として我々はどうのように受け止め楽しんでいくことができるのか。『源氏物語』という作品は全体として見た時にどういう世界なのか、といった疑問に分析を加える一環として、『源氏物語』の中で時間というものがどのようなものなのか、考えてみたい。『源氏物語』にとって時間が重要な問題であることは、たとえば加藤周一が『日本文学史序説』で述べているが、これを具体的に考える。

光源氏の年齢

光源氏の物語では光源氏の年齢を基準にして、宇治十帖では薫の年齢を基準にして、古来、年立^{としだて}という年表が作られている。主に一条兼良による旧年立、本居宣長による新年立があり、不自然さが少ない点で現在は新年立が使われているが、物語の記述にはどちらの年立でも対処できない時間の矛盾や歪みがあるが、歴史や事実の記録とは違い、書いていく中で世界を作っていくために生じるものである。

光源氏の年齢については逆算しても大きな破綻はなく、作者はかなり計算している。無目的に短編を積み重ねていくうちにおのずと長編ができたのではなく、断片的なつくりの巻を重ねながら長編を作っていたということであろう。『源氏物語』は長編としての大きな枠組みを確かに持っているといえる。しかしその中で時折、小さな矛盾あるいは大きな矛盾をあえて犯して長編世界を作っているのである。

明石一族の時間

大きな矛盾としてはまず、明石一族の時間が挙げられる。光源氏が須磨明石に下つていた折、明石の地で明石の入道から娘への期待を打ち明けられ、娘にはいい加減な結婚をしてはならないと言ひ聞かされているといったことが語られるが、この「明石」巻で明かされる話と同じ内容が、すでに「若紫」巻の北山の場面、光源氏が若紫を発見する以前に語られているのである。「若紫」のこの場面では明石の物語が見えてくるということは、明石の女と紫の上をペアで発想する作者の構想があつたと思われる。「若紫」から「明石」巻に至つて九年が経過しても同じように明石が紹介されている。明石の方には時間が流れていないのである。明石は一種の別世界、異境として存在しているといえる。

光源氏の須磨下向を海幸山幸神話に重ねる読みが古注釈からある。兄の朱雀帝の世で弟の源氏が須磨へ下り、明石の女と出会い、娘をもうけて都に戻るという挫折と復活を、海幸山幸神話を下敷きにして描いている点でも、明石の一族には神話的な性質があり、時間の流れが日常とは違う世界が作られてい

ると思われる。また、ここには光源氏だけでなく明石一族の繁栄も目論まれ、明石の入道と光源氏との間に血のつながりがあることが「須磨」巻で初めて明らかにされる。ある意味で落ちぶれた、危機に瀕した一族が異境で出会い、そこから再び新たな力を得て都の世界に復活してゆくという道筋を経る。明石の流れていない時間は、光源氏を新たに復活させるための、ひとつの神話的な要素であるといえよう。

六条御息所の年齢

時間の大きな矛盾のもう一つは、六条御息所の年齢である。斎宮となつた娘と共に伊勢へ下る出発の日、御息所が久しぶりに宮中にあがり、その感慨が語られる際、十六歳で入内、二十歳で皇太子と死別、現在三十歳という年齢が記される（「賢木」巻）。この表現は古注釈から「白氏文集」「上陽白髮人」の影響が指摘される。また、御息所は前皇太子夫人であることから、醍醐天皇皇子で皇太子のまま亡くなつた保明親王の妃、藤原貴子が十五歳で入内、二十歳で死別という点で近いとする説もある（増田繁夫「六条御息所の準拠」「源氏物語の人物と構造」）。

六条御息所の前坊への入内が伊勢下向の十四年前となると、すでに朱雀帝が東宮となつている「桐壺」巻の内容と整合しない。しかし、これは単なる作者の勘違いということではないであろう。光源氏と御息所が別れる「賢木」巻の場面は朱雀帝の時代になり、光源氏にとって非常に厳しい冬の時代である。その時代で物語が新しく展開していく時に、物語の時間そのものを変質させて過去と違う新しい時間をそこに流しはじめたと考えるべきである。物語を語

っていく中で、普通は変えられないはずの時間までも次々に変えていく。それによつて、私たちは物語の世界に現実の世界とは違う、ある実在感を感じることが出来る。時間への矛盾が生じるということは、語りながら物語の世界を更新していくという物語の書き方なのではないかと考えてみたい。

フランス文学者清水徹が「小説的時間」の独自性を強調していたことも思い出されるが（『読書のユートピア』）、小説や物語の中でのみ存在している時空を味わい追体験することこそが文学作品を読むかけがえのない喜びではなからうか。時間の歪みやずれ、矛盾を含んだ世界として『源氏』の世界を非常に躍動的なものと捉えて読んでいきたい。

六条院造営

「薄雲」巻で光源氏は斎宮女御に春秋の定めの話をもちかけ、物語の展開としては、六条御息所が亡くなつた秋を斎宮女御が、藤壺が亡くなつた春を紫の上がそれぞれ受け継いでいく構想になっている。このあたりから四季の町を揃えた六条院の出発点がはっきりと見えてくる。六条院は「四方四季」の神話的空間ともいえるが、春が紫の上、夏が花散里、秋が秋好中宮（斎宮女御）、冬が明石の君という形で、四人を中心とする四つの町を構成している。これらの人物と季節の関係は早くから下敷きができていた。紫の上は春の登場で始まり、秋に亡くなつた六条御息所は「夕顔」巻での登場が秋、花散里も源氏の須磨下向前に橘の散る花散里として出てくるなど、物語はだいたい早くから季節と人間とを結びつける発想をしているのではないか。冬と明石の君との結びつ

きだけは、冬に源氏に出会ったわけでもなく、多少意味合いが違うように思われるが、『薄雲』巻、娘を光源氏のもとに手離す雪の場面は印象深い。

冬の場面でいうと、『朝顔』巻後半、雪が積もり月が照る中、光源氏が紫の上と、これまで関わった女君のことを話題にする場面は大変美しく印象的である。女君との関わりを振り返りつつ、改めて紫の上との間が結びなおされていく。そして六条院の構想も動き出していく。物語が過去を振り返りながら、冬の夜の月という一般的美意識ではない光景の中で新たな展開を設けようとしているところだといえる。

引用の想像力

「桐壺」巻の鞍負の命婦の弔問の場面で引き歌として指摘されている歌、「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまだひぬるかな（後撰集・雑・一一〇二・藤原兼輔）」とふ人もなき宿なれど来る春は八重葎にもさはらざりけり（古今六帖、貫之集・紀貫之／三条の右大臣の屏風の歌）の詠み手や状況に注目すると、藤原兼輔も貫之集の歌の詞書の「三条の右大臣（＝藤原定方）」も紫式部の曾祖父である。また、命婦が持ち帰った更衣の遺品を見た帝が更衣を改めて思い出す場面の、「花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき」という表現は、紫式部の祖父藤原雅正が貫之との間で交わした歌「花鳥の色をも音をもいたづらにもの憂かる身は過ぐすのみなり（後撰集・夏・二一二）」をふまえているという見方がある。これは単に更衣を失った悲しみというだけではなく、作者紫式部にとって『源氏物語』の最初の死の

悲しみ、喪失の悲しみを語るときに、自分の父祖である藤原兼輔、雅正、定方、彼らと親しかった紀貫之のグループへの連想があるのではないか。貫之の土佐在任中に醍醐天皇、兼輔、定方が相次いで亡くなったことは、『土佐日記』の「亡児追懷」のモチーフに結びつき、展開される。『源氏物語』で桐壺更衣の死を最初に語るとき、自らの祖父曾祖父達の世界、十世紀前半の歌の華やかな世界、そして中納言や大臣を出した自分の家が中流階級に下っているといった作者の身分意識が表れているようにも思われる。このことは明石の問題、光源氏の時間という問題にもつながってくるのであろう。

（文責 日本女子大学国語国文学会）

加速する情報資源と図書館 大谷康晴

1. 図書館・情報メディアの歴史と図書館

図書館の機能は、情報資源の収集・整理（組織化）・保存・提供の四つがあり、これは成立から現代まで一貫している。ただし、この比重は時代によって変わっている。前近代的な図書館では資料が高価であり、保存が前面に出ていた。19世紀半ばに現代につながる公共図書館がイギリス（マンチェスター）とアメリカ（ボストン）で成立する。この時代には、洋紙製紙法（パルプによる製紙法）と公教育が確立し、大衆としての読者が登場している。結果として、複製（印刷）された資料を基盤に利用による劣化・紛失を気にしないで、提供に力点を置くことが可能になっ

た。この時代から図書館では、資料の提供が優先され、保存は利用のためと位置付けられていく。

2. 社会と情報メディア

情報メディアとは、情報を伝達する器を指す。コンテンツ（内容）に対する概念であり、図書館は情報メディアを資源として活動を行う。メソポタミアでは、粘土板に楔形文字が刻みこまれていた。ローマ帝国ではパピルスを使用した一枚もの、もしくは巻子本が情報メディアとして使用されていた。その後、ローマ帝国末期には冊子体に移行していく。キリスト教は、随時正典を参照する必要上、任意の箇所を参照できる（フランダムアクセス）機能が不可欠であったため、成立後早くから冊子体が利用されていたからである。さらにパピルスでは冊子体に不向きなため、羊皮紙・冊子体といった形で知識・情報が記録されていくが、羊皮紙は高価であるため、ヨーロッパでは聖職者・王侯貴族のみが本を専有するものとなった。東洋では、中国やわが国では竹簡・木簡が使用され、南アジア・東南アジアではオウギヤシなどの植物の葉などを加工した貝葉によって記録されていた。

このように世界的に見て、情報メディアは社会的要因によって選択されていた。ただし、気をつけなければならぬのは、キリスト教成立後早く、すなわちローマ帝政初期に冊子体が確認されるもの、急速に普及してはいない点である。つまり、情報メディアは新技術ならば無条件で普及するものではなく、技術的要因以外の要素も含めて社会によって選択されることが分かる。

3. 情報メディアとしての本

一方、現在私たちが使用している情報メディアは本である。本は、紙・冊子体・活版印刷によって構成されている。西洋における活版印刷はグーテンベルクが15世紀半ばに聖書を印刷したのが最初である。宗教上必要であるのにも関わらず大変高価であった。そのため聖書は一般の人々には入手できないものであった。そのため、本のコストを低減させた紙と活版印刷はヨーロッパで受け入れられた。同時に、活版印刷は宗教改革に大きな影響を与えたとされている。つまり、本は社会状況ゆえに受け入れられたが、同時に社会に影響を与えている。このように、社会と情報メディアの関係は相互作用となっている。

紙+冊子体+活版印刷=本という情報メディアが5世紀続いてきたが、20世紀になり、活版印刷はCM（コンピュータ製版）に置き換わった。しかし、現在私たちが知る本は、たとえば、索引、ノンブル、あるいは、章立てという構造化された文書といったさまざまな技術も取り込まれて成立している。さらに、本や雑誌を前提として、知識の生産・流通プロセスが成立し、私たちの思考を成り立たせている。

メディア論によると、メディアは身体を拡張させるが、単純な強化ではなく変容を伴うとしている。つまり、電子資料を情報メディアとして受け入れていくことは、それに基づく新しい思考に変容することを受け入れる必要がある。社会に影響を与え、私たち自身の思考も変容させることを考えるとそれほど簡単なことではない。

4. 加速する情報メディアと図書館

情報メディアを取り巻く環境も変わってきている。コンパクトディスク（CD）は規格成立が一九八〇年であるが、アメリカでは、音楽市場での売上が二〇〇〇年に90%以上であったのに、二〇一〇年には50%を下回っている。また一九七八年に登場した日本語ワープロ専用機は、二〇〇二年には生産が完全に終了している。つまり、登場から衰退までのスパンが短くなっている。

SONYが発売したDATは、一九八〇年代にCDと同等の音質で録音できたが、その音質ゆえにレコード会社からの反発を招き商業的には失敗することになる。その後MP3は、補償金制度の導入、そして、ある音質が劣化するといった社会的な環境を整えたMDで一定の成功を収めることになる。さらに日常的に見ているコンピュータのキーボードでもこの種の問題が見られる。現在のキーボード（欧文）は本来タイプライターで使われていて、コンピュータで使用する必然性はなかったが乗り換えが面倒ということとでそのまま使われて現在に至っている。つまり、技術を受け入れる時、社会は常に合理的な判断をしているわけではないということになり、これは情報メディアでも同様である。

したがって、図書館として電子媒体ベースに全面的に移行するのではなく、当面の間は、従来の紙媒体と電子媒体によるハイブリッドライブラリーという姿が予想されることになる。

【訂正】前号（No.47）3頁下段、「研究室だより」日本文学科国語科教員採用情報ネットワーク登録先は、「正しくは「richbuninfo@fcjvua.jp」です。

関係者並びに読者の皆様にはお詫び申し上げます。

【会計係より】◇会費年額千円の納入をよろしくお願いいたします。▼（納入先）日本女子大学国語国文学会 ゆうちょ銀行振替口座番号 00190-6-9707

◇国語国文学会会員住所変更連絡先・新規会員登録先 〒一八四・〇〇一五 小金井市貫井北町一・二一・一〇 立川和子 ▼日本女子大学国文学科・日本文学科の卒業生で、まだ会員に登録していない方を存じでしたら、ぜひお誘いください。

【研究室より】◇みなもところう編『古典劇との対話―今、舞台表現の魅力を探る』（翰林書房、二〇一二年三月）が刊行されました。桜楓会実業部でもお求め戴けます。

◇『国文目白』第52号「源五郎教授退任記念号」をご希望の方は葉書でお申込みください。送料別、千円（冊子到着後払込み）▼（申込先）〒一一二・八六八 一 文京区目白台二・八・一 日本女子大学文学部日本文学科研究室「国文目白」係

【訃報】▼田中功先生（図書館情報学）が去る二月二十五日脾頭部癌のため逝去されました。「田中先生を偲ぶ会」を開催する予定です。六月二十九日（土）午後一時半より 於新泉山館▼熊坂敦子先生（近代文学）が去る四月二日に逝去されました。「熊坂先生を偲ぶ会」を開催する予定です。七月二日（日）午後一時半より 於新泉山館▼共に会費無料

二〇一三年五月一日発行

日本女子大学日本文学科国語国文学会卒業生の会
〒一一二・八六八 一 東京都文京区目白台二・八・一
日本女子大学 日本文学科内